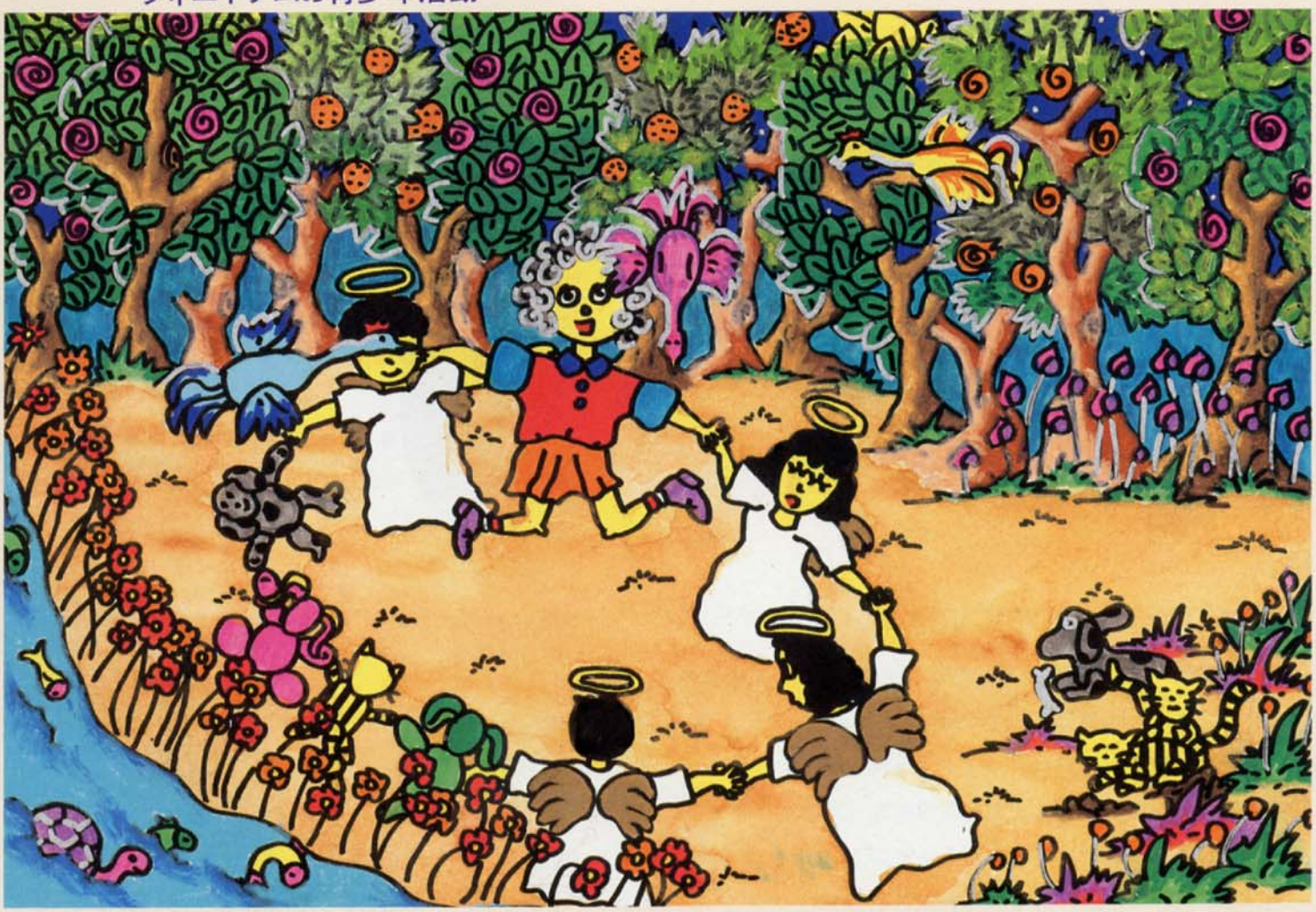
国際交流事後活動ニュース

MACROCOSM

マクロコズム '97.5

◎特 集　各都道府県IYEOの活動
ヴィエトナムの青少年活動



vol. 16

㈶青少年国際交流推進センター

地域の活力を生かして!

地域の国際化を奨励する声に支えられて、各都道府県での国際交流活動は、多様な面から活性化してきています。中でも外国青年の招へい受入れは、地域の国際交流活動に良き刺激となり、活動の楽しさを実感させてくれる事業となります。

総務庁の青少年国際交流事業では、全ての事業に地方旅行として各地でのホームステイを含めた交流活動が組み込まれています。

「アジア太平洋青年招へい事業」でも、平成8年度は、10月30日から11月4日の期間に福島県、徳島県、佐賀県、沖縄県、広島市の5県市に分かれて地方交流プログラムが展開されました。

〔広島市〕平和公園での献花や原爆資料館の見学など、広島らしさを含めて計画的で丁寧な受入れが実施され、参加青年を満足させてくれました。

◀ 日本の伝統的遊びを体験するプログラムで折り紙に一生懸命のフィジーの青年

アジア太平洋青年招へい事業

戦後50年を記念して、平成7年度に始まった事業。アジア太平洋諸国27か国を対象に、これらの国の青年を日本に招へいし、「アジア太平洋青年フォーラム」、地方交流プログラム、課題別視察等への参加により、日本の実情を理解させるとともに、日本及びアジア太平洋青年諸国の青年相互の友好と理解を促進し、併せて日本の青年の国際的視野を広げ、継続的な平和と繁栄を希求する精神を育てることをねらいとしています。

平成8年度は、平成8年10月27日から11月7日までの12日間で、オーストラリア、中国、韓国、ブルネイ・ダルサラーム、カンボディア、フィジー、インドネシア、ラオス、マレイシア、ナウル、ニュー・ジーランド、パラオ、フィリピン、西サモア、シンガポール、ソロモン、タイ、トゥヴァル、ヴィエトナムの19か国から117名が招へいされました。

〔徳島県〕年代の高い既参加青年の助力も得て、見学コースも多彩になり、あたたかい受入れが行われました。

子供たちと一緒になってイモ掘り体験 ▶

〔福島県〕ぜひとも受入れ活動を行いたいとの多くの声に応え、飯館村と会津若松市の2グループに分かれて地方色豊かなプログラムを楽しみました。

◀ 福島の味、甘〜いリンゴにグー！

◀ テレビ局見学にてカメラマンに挑戦

〔沖縄県〕初めての総務庁事業受入れに、県の皆さんを始めとして、IYEOスタッフも大張り切り。最高の持てなしでした。

▼ フェアウェルパーティーで沖縄民謡を共に踊る

〔佐賀県〕有明海干潟のムツゴロウ、小学校での交流劇など多くの出会いがありました。

東京プログラム～課題別視察～

▲ 一人の外国青年に一人の児童がついて案内役をつとめました。展示教室で市ヶ谷学校の歴史を見てもらいました。説明は大変?!

11月6日、5コース（国際協力、政治、経済、マスコミ、教育）に分かれて実施されました。
最も人気の高かったのが、教育コースの小学校訪問でした。どこの国でも、子供は次代を担う大切な力です。しかしながら、実際には世界中に基礎的教育さえ受けられない子供が数多くいます。

平等で自由な教育を全ての子供に与えることは、私たちの大きな目標の一つと言えるでしょう。

今回、東京で受け入れて下さった新宿区立市ヶ谷小学校は、外国青年の訪問を受けるのは初めての学校でしたが、先生方の大変な努力と子供たちの素直な歓迎で大成功のプログラムとなりました。

新宿区立市ヶ谷小学校での楽しい一日

▲ 体育館で日本のスポーツや芸能を披露
剣道に太鼓にと積極的な外国青年たちは、子供たちと楽しい時間を共有しました

最後に、仲良く給食を楽しんでお別れの時間
▼ 涙ぐんでいる外国青年もいました

ヴィエトナム同窓会組織設立を目指して

森田副会長と赤澤国際担当幹事が、3月末にヴィエトナムの「東南アジア青年の船」受入れ担当組織であるCYDECO（国際青年協力開発センター）や大使館などを含めて青少年活動調査のため、ハノイとホーチミンを訪問しました。

（本文P.14参照）

CYDECOの職員の方々と（ハノイ）▶

ボランティア活動と組織

一人一人の自覚が活力ある組織を育てる

日本青年国際交流機構中国ブロック幹事　**小塚　昭郎**
（島根県国際交流青友会副会長）

IYEOを構成する各都道府県組織は任意のボランティア団体である。善意の個人の集まりが自由に活動でき、そのポテンシャルは限りが無い。

しかし、一歩間違うと、社会的責任が無く、勝手な思い付きでやりたい事をやって、熱心な人間がいなくなれば休眠する。私の属する島根県国際交流青友会は、全国組織の中では比較的熱心に活動を継続してきた団体であると自負しているが、その内実は安定しているとは言いがたい。

1968年に発足して以来、受け入れ事業、支援活動、スタディツアー、シンポジウム等広範囲の活動が出来たのは、以下の理由によると思う。

① 県単独派遣事業参加者も含めた会員約700名の層の厚さ。

② 県行政の理解を得て、専任の事務局（員）を置いていること。

③ 30年間の活動を通じ、県内国際交流団体のリーダーと認知されていること。

一方で困難も多く、問題点は多い。

① 自前の財源に乏しい。

② 受け入れ事業は委託が多く、マンネリ気味。

③ 活動が松江市を中心とした東に偏っている。

④ 役員会などの情報が会員まで伝わりにくい。

⑤ 役員交代がままならない。

⑥ 人材育成のノウハウを持っていない。etc

～社会活動による人材育成の大切さ～

しかし、この解決は以外とたやすくもあり、難しくもある。お金については、近年種々の助成が充実されたきた。むしろ、助成側では借りてくれる優れた団体の出現を待っている。また、本会では、新年度から会費の確実な徴収のため口座引き落としを実施予定だ。②③④の問題は、集団活動ではよくある問題であり解決策も見つけやすい。行き着くところ、⑤⑥の「人」の問題に尽きる。

主な内容

ボランティア活動と組織……5
ジョルダンに靴下を送る……6～7
民間援助でラオスに小学校を……8～9
青年国際交流と理解の集い……9～10
北海道青年国際交流機構……11
特別対談　上岡　弘二……12～13
ヴィエトナム青少年活動調査……14～16
重油の海に見たもの……17
選挙監視派遣団……18
青年海外協力隊の募集について……19

〈表紙の説明〉
インドネシア　14歳
ライシナ・アリザさん
「もしも私が天使なら」
アジアのこども絵画展より
優秀賞受賞作品

本会が活動を継続してこられたのも、その時々の中心メンバーが会の運営を生活の一部としてとらえ、家族ぐるみで時間を費やし資金提供も含めて献身的に取り組んできたからに他ならない。（もちろん責任感ばかりでなく楽しみながら。）

これまでの日本に欠けていたのは、行政に頼るばかりではなく、自主的な自立した社会を作る心意気だ。市民の自発による非営利の団体に価値を認め、活動を助長しようという空気も薄い。

数年前、アメリカNGOリーダーとの交流で得たものは、社会に時間、お金、能力を還元することを市民生活の一部であると当然のように考えていることを知った事だった。

しかし、日本社会も変わってきた。岡山の「アムダ」のように、地方に拠点を持ち、医師が有事の国へ迅速に飛んでいくような組織もでている。ボランティア休暇、NPO法案など風は追い風。幸い、IYEO会員は、好奇心に溢れ、それぞれの社会的分野で特技を持った能力の高い集団だ。島根県でも、有意な人材育成からはじめたい。

制度の整備とともに、それを活用できる人材がいなければ、社会の中で有効に機能しない。また、人材なくして、よき制度も生み出せないであろう。学校教育では、身につけにくい分野の人材育成を担えるような組織になるべく努力したい。

一通のエアメールから始まった援助活動

～ジョルダンに靴下を送る～

香川県青年国際交流機構　原　郁

平成8年10月中旬、一通のエアメールが私のもとに届きました。差出人は、私が平成6年度国際青年育成交流事業ジョルダン派遣中、青年海外協力隊との活動時にお世話になった入倉さん、現在NGOの一員として平成6年度よりジョルダンの社会福祉施設で働いている方です。ジョルダンでは雨期が始まっていた頃でした。

彼女の手紙には、「私の働いている福祉施設は国営施設ですが、少ないボランティア職員が大勢の園児の世話をしているので、教育にならず、まだ暖房が効かないという有様です。子供達は、冬でも寒い教室の中で裸足でいるので、せめて靴下だけでもはかせてやりたいと思っています。そこで、日本の方たちの古着の靴下があれば送ってもらえないでしょうか。」と、大人と子供合わせて150人分の靴下の要請がありました。

▼ 担任と先生とともに子供と遊ぶ入倉さん

そこで、まずその直後に開かれた香川IYEOの役員会でこの話を持ち出してみたところ、早速レスポンスがあり、「会として取り組もう」ということになりました。そして11月には香川県海外派遣友の会（注：香川県独自で行っている派遣の事後活動団体です）の役員会においても支持が得られ、靴下集めが始動しました。「手紙を見て窮状は分かったものの、一人で援助するには話が大きすぎる」と途方に暮れていたのも束の間、瞬くうちに話は県庁、小・中学校などに広まり、各方面から応援がありました。

靴下製造企業にもお願いに伺いました。12月の役員会では、各理事さんが、抱えきれないほどの新品・古着の靴下を役員会会場に持ち込んで下さいました。また、この援助の話を11月末に宮崎にて行われたIYEO全国大会会場にて香川IYEOの理事が懇親会の席で話をもちだしたところ、沖縄県IYEOの金城氏（平成7年度国際青年育成交流事業ジョルダン団長）が「送料の足しに」とご寄付を下さいました。

こうして集まった靴下は3,000足を越えました。しかし、最初は予想しなかった「送料」が大きな壁になりました。1月に入って、まず、1,419足（これも香川IYEOの財政的な問題によるもの：予算的に苦しかったため）を特大の箱3つに詰め込んでジョルダン北部の心身障害者施設「Jerash Center For Welfare and Rehabilitaiton」へ船便にて送付しました。船便だと到着までに2か月程かかるとのことで、冬が終わってしまうのではないかと思いましたが、財政的に船便しか余裕がありませんでした。送料は、寄付いただいたものに加え、香川IYEO会費から捻出しました。

せっかく送った靴下が輸入の扱いを受けて関税がかかるのを防ぐため、発送と同時にインボイスを入倉さんあてに送り、「支援物資」としてジョルダン社会開発省にて免税の措置をとってもらいました。

そして3月初めに入倉さんからFAXを頂き、「本日荷物が無事到着した。新品がたくさん入っていたので大喜び。また、古いものでも日本製品はゴムなどがしっかりしているから長く使えそうでうれしい」とのことでした。また、近いうちに写真を添えて手紙を下さるそうです。

今回靴下支援を終えて感じたのが、物資を集める前にまず、「送料」の心配をしておかなければならない、ということでした。物資は比較的簡単に集めることができ、予定の150足は瞬時にクリアし、最終的に膨大な量の靴下が集まりました。しかし、結果的には、すべてを送ることが出来ず、半数は他の団体の行う援助物資として寄贈することにしました。

今後、香川IYEOの一つの活動の柱として「国際援助」を掲たいと考えています。

① 不要品バザーを行い、売り上げを援助の送料に充当する。

② 或いは利益を直接送金し、現地にて物資を調達するなどの方法も検討しています。

▶朝食の様子
先生の数が少なく多くの子供の世話をするため、あわただしく子供の口に押し込むように食べさせる

民間援助でラオスに小学校を！

～その後の活動報告～

高知県青年国際交流機構会長
（第16回日中青年親善交流参加青年）
山中　茂

◀ 1996年12月18日竣工した三つめの「高知ラオス友好小学校」

私たち高知県青年国際交流機構の会員とJICA（国際協力事業団）の帰国専門家県連絡会の会員とで組織した「高知ラオス会」というNGOが、ラオスに小学校を建てる活動を始めてから今年で3年。一昨年には、多くの方々の援助によりビエンチャン県の二つの村に小学校を建てることができました。この活動の様子は、1996年版IYE年報で報告させて頂いた通りです。

その後、私たちは、ビエンチャン県の協力要請のもとに次の小学校建設予定地を決定すべく、ビエンチャン県の教育担当係官とFAXで何度も協議するとともに、県内各地でパネル展や講演会を開き、また資金確保のためいろいろな国際交流イベントにブースを出展し、ラオスの絹織物や染物、民芸品等を販売するなどの活動を行って来ました。こうした活動のほか、私たちは新しい展開を求めて、三つの取り組みをしてみることにしました。

三つのチャレンジ

一つめは、高知県国際交流協会の協力のもとJICAの「21世紀のための友情計画」ラオス教育グループの青年の受入れを行うことでした。私たちがラオスという国の将来を本当に考えるなら小学校建設というハードウェア的な支援ばかりではなく、「人材育成」というソフトウェア的な支援も必要ではないかと考えたからです。と同時に、招へい青年らと交流することによって私たちも多くのことを彼らから学び取ることができ、NGOが抱えている様々な問題点を彼らを通すことによって客観的に判断できるのではないかとも考えたからです。

二つめは、3校目の小学校建設計画にあたって、郵政省のボランティア貯金による援助事業に活動援助申請を行うことでした。申請に際しては、煩

JICA「21世紀の友好計画」の研修で
▼ ラオス青年と受講する筆者

雑な手続と提出書類に労を費やし、大変な事ばかりでしたが、継続的に財源を確保することが困難な小さなNGOとっては本当に有り難く頼もしい制度だと思います。

三つめとして、招へい青年のホストファミリーや募金活動に携わってくれた方々を中心にラオスへのスタディツアーを行ったことです。これは自分の行動に最後まで責任を持つために、そしてその成果を自ら確認し実感してもらうために行いました。こうしたことが国際協力に対する理解を深めていくのではないかと考えます。

私たちのような小さな団体が、継続的な協力活動をしていくためには、イベント色の強い華やかな活動をするのではなく、今までに成してきた活動の一つ一つを積み上げ、そして相手国の事情と私たちの活動の趣旨を理解してくれる人を一人でも多くつくっていくことだと思います。こうした活動スタンスのもと、私たちは、昨年12月、3回目のスタディツアーを行い、ビエンチャン特別市より国道13号線を車で2時間のところにあるカーム村にて三つめの小学校の竣工式に立ち会ってきました。そして、この8月には4回目のスタディツアーと次の事業に向けての調査を行う予定です。

皆さん、一緒にラオスに行ってみませんか。

“食”をテーマに「青年国際交流と理解の集い」

滋賀県青年国際交流機構　石川　哲也
（第18回日中青年親善交流事業参加）

1月25日（土）～26（日）にかけて、滋賀県内及び近隣府県に来日している留学生・研修生と滋賀県内の青年、約80人あまりの人数で、「食」をテーマにして交流を行いました。出席者は、中国・ケニア・タンザニア・カメルーンほか8か国からの研修生らで、来日して約半年が過ぎようとしている方々でした。

第1日目は、受付後、ルームメイトと顔を合わせ、まもなく交流会。皆、初対面のせいか少々緊張している部分もあり、ほぐすために自己紹介もかねてゲームをしました。ゲームと言っても「おんぶじゃんけん」「拍手で集まれ」など、ごく簡単なものですが、全員で体を動かし、そのうちにグループができ、次第にうち解けあい、言葉の壁はあったものの和やかに行うことができました。

続いて、季節がら、「日本のお正月」ということで、独楽回しなどの日本の伝統的な遊びや、書き初め、お茶席等いくつかのブースを作り、自由に参加できる形式にして紹介しました。お茶席は人気があり、今回、参加者自身でもお茶を点てるデモンストレーションが経験できたことは好評でした。

夕食後は、いよいよ今回のメインテーマでもある「食」について各グループに分かれて分科会を

行いました。「日本料理と中華料理の違い」「各国の“食”事情」「料理づくりにみる男女の役割分担」等々、豊富なテーマで各グループとも大変盛り上がった様子でした。かくして、スタッフ側が抱いていた、みんなうち解けあって活動が楽しめるだろうかという不安とは裏腹に、思っていた以上に参加者同士、また参加者とスタッフ同士でもすぐにうち解け、あっという間に1日目のプログラムが終了しました。

雪をかき分けての収穫作業

第2日目、「食」というテーマにひっかけて、農業体験プログラムが行われました。日頃、私たちが市場で見かける野菜や果物……実際にどのように実り、収穫され、出荷されるのか……。普段は、あまり気にしていないことですが、今回は、季節の野菜の白菜そしてイチゴ、ほうれん草の3つの収穫体験を行いました。くじでどの野菜になるか決め、いざ現地へ出発……。白菜を採ることになった仲間たちは、半分憂い顔(?)。それもそのはず、前日の晩にしっかりと雪が降ったため、到着すると白菜は雪の中に半分埋まっていました。でも、みんな気を取り直し、農家の方の説明を聞き、実際に収穫が始まりました。外国青年も含め、我々日本青年も白菜がどのように育ち、収穫するのか知っているのは少なく、みんな楽しんで、あっという間に100個近く収穫してしまいました。大量収穫に、みんな大満足でした。

収穫物を近くのフラワーセンターへ持ち寄り、昼食にその材料を使って調理しました。その間、入り口ではウェルカムイベントとして、町内の子供たちがまつり太鼓を披露したり、近くの農家の方の協力で、餅つきなどが催され、外国青年たちも、実際に餅をついたり、太鼓をたたいたりと普段の生活では経験できないことに楽しんでもらいました。

会食パーティーでは、ママさんコーラスの美しい歌声に包まれ、和やかなムードになりました。全員が会場内において話が弾み、自分の収穫した野菜を使った料理を堪能しました。最後には、一時一世を風靡した「マカレナ」が会場内に流れ、洗練された(?)スタッフの手本を見よう見まねで、最初は若者たちが踊りだし、そのうちにフラワーセンターのスタッフ、農家の方と最後には全員が一緒になって踊り、交流会の幕が閉じました。

出会いから活動へ

帰りがけに、参加した外国青年が、「農業体験や遊びがとてもおもしろかった。また参加したい……」とか、日本の青年にも「はじめは緊張したけど、うち解けてとても楽しかった、こんな楽しい企画が自分の身近なところにあったなんて、今後も参加したい」という、うれしい感想をいただきました。

今回、初めてこのような交流会を行いましたが、参加した青年が、これをきっかけに我々IYEOの一員として活動してくれたり、様々な面において参加者には何らかの収穫があったようです。4月からは、新しいメンバーも加わり、にぎやかになってきた滋賀IYEOですが、今後も、このような活動を企画し、より多くの人々と知り合い、身近なところから国際交流につなげて活動していきたいと思います。

北海道・東北ブロック大会がインパクトになって

上森奈穂美

北海道IYEOは会員が約250名おり、組織づくりをする傍ら、参加青年の壮行会・報告会、そして会報の発行を中心とした活動を行っています。

平成7年10月、北海道にて北海道・東北ブロックのブロック大会が開催されましたが、それまでは北海道IYEOは休眠状態で組織の形をなしていませんでした。そのため、札幌・小樽を中心に呼びかけ実行委員を集めるところから準備が始まりました。集まったメンバーは会長を中心とする熟年チームと派遣から帰ったばかりの若者チームの両極端でしたが、それぞれ得意な分野を受け持ちブロック大会に向けて話し合いを進めました。

当時、北海道IYEOの名簿すら手元に無い状態で、ブロック大会の準備はかなり大変でしたが、北海道のみならず、東北6県や東京本部からたくさんの方が参加して下さり、これがきっかけで北海道IYEOも再出発することになりました。

その後、集まって今後の活動をどうするかということを話し合ったとき、まず出たのが、自前の名簿を作成し会報を発行すること、壮行会と報告会をしたいということでした。10月のブロック大会終了後、報告会並びに「第8回世界青年の船」の壮行会を企画し12月に実施しました。

次の目標である名簿の作成と会報の発行ですが、平成8年4月に道内全会員向けにアンケートと会費に関するお知らせを発送しました。同時に、マクロコズムに同封されるブリティンボードを利用して、会員への呼びかけを始めました。

長い間活動をしていなかった組織に対して会費を納入してほしいとお願いしてもすぐに理解していただけないのは当然のことだと思います。幸い、ブリティンボードを利用すれば送料がかからないばかりか2か月に1度、活動の状況を道内の全会員にお知らせすることが出来ます。

年4回の会報発行を目指して

会報に関しては今のところ予算の関係で年会費を入金して下さった方と新しく会員になった方のみに発行しています。会報は年4回発行する予定ですが、今後は全会員参加の会報づくり、イベントの企画などを目標に活動していきたいと思います。また、昨年の報告会・壮行会には北海道庁の国際交流課の方も参加して下さり、今後は北海道で受入をしている総務庁の各事業のお手伝いもしていきたいと思います。現在は札幌近郊が活動の中心となっていますが、各地にIYEOの支部をつくり多くの方に参加していただきながら道大会や研修会を開催することも計画しています。

北海道IYEOの皆さん。共に国際交流活動を楽しみましょう！

▼ 平成8年度派遣のメンバーの報告会（H8.12.14）

特別企画「この人に聞きました」

▲ 写真展の東京会場にて

等身大で物を見る大切さ

～時を経て知る国際交流の意味～

東京外国語大学教授
（「第８回世界青年の船」団長）
上岡　弘二

Q：上岡団長ご自身が「第８回世界青年の船」から受けた影響は？

A：これまで私は、イランを中心としたイスラム世界に接してきましたが、今回はエジプト・UAE・イエメン・カタールといった同じイスラム教徒でありながら、イスラムを違った捉え方をしている青年たちと生活を共にしたことは自分にとっても大きなショックでした。例えば、イスラム教徒の聖典であるコーランの取り扱い方にしても、まず手を清めてから触れるようにと指摘されたり、イランでは家庭にモハメッドの絵が普通に飾られているのに、それを講義中に見せると予想を越えた大きな反発にあったりと、これまでイスラムの実態だと思っていたことが、全く違うということを目の当たりにしたことで、自分自身のイスラム観をもう一度考え直す良いきっかけになったような気がしています。

Q：イランに関心をもつようになったきっかけを教えてください。

A：もともとはインドのサンスクリット語を始めたのがきっかけで、それが少し西にずれた結果イランを研究するようになりました。ある研究者によるとイランは５千年もの歴史があると言うほど、古い文化・文明をもっている国。シルクロードを通して日本とも深いつながりのある国でもあります。私自身は今では、イラン研究といいながらも、人とのつながり、付き合いがおもしろくて研究を続けています。でもまだまだ日本でのイメージはあまり良くないのが現状のようですね。

Q：団長も長年イランとの国際交流を続けておられるわけですが、この「国際交流」の意義についてお考えをお聞かせください。

A：国際交流はすぐには目に見える成果がでないけれども、時間と共にボディブローのようにその効果がでてくると思います。ODA のようにモノを通じての交流は即効性はあっても後には残らない。そこに、日本や日本人の姿は見えてこないわけです。それに比べて「世界船」のように、船上で出会ってから長い年月が経過して、たとえ付き合う人数が１割に減っていたとしても、その絆はもの

すごく強いものだと言えるでしょう。数人だけでも等身大で目に見えていれば、とても大きな意味を持つと思うのです。

また、このような交流事業は個人の「人間変革」の場になることもあると思います。日常の生活では気づかなかった自分の能力が、周囲の仲間に認められて自信をつけるなどという場面がけっこうあるわけですね。こうして開花した能力を、事後活動などに活かせると良いのではないでしょうか。船上生活そのものは、実は事後活動のための事前活動なわけですから。

Q：これからの「世界船」に対して一言

A：参加青年に対しては、まずは日本のことを知ってほしいですね。よく国際人という言葉が使われますが、自国のことを理解していない、いわゆる「根無しの国際人」では困ると思うのです。日本を説明できる青年たちが、様々な国の青年と接することで、改めて日本人としての自分と日本の位置を確認することはとても重要なことだし、国際交流事業のもう一つの目的ではないでしょうか。

また、「世界船」事業については、むろん予算的に難しいのは承知の上ですが、毎年東西にそれぞれ船を運行できれば理想的だなと思います。こうすることで、これまで4～5年は招聘されなかった国が、2～3年に1回程度は参加できるようになり、これによって各国で誕生した同窓会組織が成長していくなによりの刺激になると思うんですよね。

私自身も、今回このような写真展という形で自分なりの事後活動をしていますが、これから「世界船」で植えつけられた種が、各地の活動を通じて芽吹き、大きく育っていくことを期待しています。

上岡団長の写真展 大阪にて開催！

「青年群像 '96」

会期：1997年8月1日～8日
会場：ミノルタフォトスペース大阪
（大阪サービスセンター）

〒530 大阪市北区梅田1－11－4
大阪駅前第4ビル7F
TEL 06－341－6501

▲ 船内の修了式で青年に修了証を渡す上岡団長

上岡弘二氏のプロフィール

上岡弘二（かみおか こうじ）

1938年11月19日生　B型　京都府（浄瑠璃寺のある町）出身。京都大学文学部梵語・梵文学科卒業。
1972年以降、アジア・アフリカ言語文化研究所（東京外国語大学付置）でイラン担当。イランの言語・遺跡・民間信仰を研究対象としている。自己表現の手段としては、イランでしか撮らない写真・秋篠阿修羅のペンネームで書く短歌。動物では特に猫に知り合いが多い。
「第8回世界青年の船」には団長として乗船。乗船中に撮った写真展「青年群像 '96」を開催。

「東南アジア青年の船」ヴィエトナム既参加青年に出逢って

日本青年国際交流機構幹事（国際担当）
赤澤　美雪

私は、総務庁青少年対策本部の派遣により、3月23日から27日の5日間、ヴィエトナム（ハノイ・ホーチミン）訪問の機会を得た。目的は、昨年「東南アジア青年の船」に正式参加したヴィエトナムの既参加青年が「船」に対しどんな印象を持ち、どのような事後活動が可能であるのか、ヴィエトナムの青少年活動がどうのように行われているのかということを調査してくることであった。

現在、ヴィエトナムには「第22回東南アジア青年の船」のオブザーバー参加した8名と第23回の参加者40名を合わせて48名の既参加青年がいる。しかし、東南アジア青年の船の既参加青年ではない私は、正直言って「殆ど面識のない方と一体どんな話をしたらいいのか」と不安に思いながら出発した。

この心配は無用だった。ハノイでの夕食会には16名の既参加青年が集まってくれて伝統的ヴィエトナム料理を御馳走になりながら「東南アジア青年の船」への熱い思いを聞くことができた。

また、南のホーチミンでは、4名の既参加青年に会い、市内の案内までしていただいた。

「東南アジア青年の船」という一つの事業を通じて、見知らぬ異国の人が瞬く間に「友人」となっていく。最初は「国の交流事業」であったものが、2度目からは「民間交流」になり、各国に着実に根づき広がっていく。そんな不思議で心温まる体験をしたと思う。

現在、ヴィエトナム既参加青年は、来年度参加青年に対する「事前研修」を企画しており、将来的にはホームステイの実施を計画している。参加回数を重ね、既参加青年が増えた時点で、同窓会を設立したいと意欲的に考えている。

この原稿を書きながら、自分が、今回の訪問により一刻も早くヴィエトナム同窓会が設立され、SSEAYP International に正式加盟する日を心待ちにする一人となっていることに気づいた。

最後に、忙しい中にも関わらず、あたたかく迎えて下さったMr. Loiを始めとするCYDECO（国際青年協力開発センター）のスタッフの皆さん、また丁寧に対応していただいた日本大使館の穴吹参事官、石田氏及びホーチミンの日本総領事館の小野領事、小島氏に深く感謝致します。

◀ 既参加青年に囲まれて（ハノイ）

Vietnam Youth Federation

ヴィエトナム青年同盟（Vietnam Youth Federation）は、1955年11月20日に設立された半官半民の青少年団体で、28歳以下の青年を対象にヴィエトナム全土に直接会員を有すると同時に各種の青少年団体が団体会員として加盟しており、連絡調整機能もあり、各団体を把握している。

主たる青少年加盟団体としては、共産党中央委員会の下にあるホーチミン青少年同盟、（Ho Chi Minh Communist Youth Union：会員数260万人、対象年齢15〜23歳）をはじめ、全国学生協会（National Student Association：会員数80万〜100万人、対象年齢17〜28歳）、少年少女協会（Pioneer Association：会員数110万人、対象年齢、7〜14歳）のほか、ヴィエトナム青年企業家協会、青年建築家協会、青年教員同盟、シクロー運転手協会などの職業・職種別非政府組織がある。

ヴィエトナム青年同盟は政府と緊密な連携をはかりながら、青少年育成に関する施策や行動計画の立案、共産党綱領に盛り込まれた青少年に関する施策や5か年計画の実施に当たっている。「緑化、美化、清潔化」運動を展開中である。

主たる活動領域は、教育、教育支援活動、環境運動に分かれる。

(1) 教　育
- ① 農村や遠隔地、山間部の山岳民族に対する識字教育
- ② 青年活動への動員

(2) 教育支援活動
- ① 貧しい児童・生徒への奨学金制度
- ② 有能な人材の支援
- ③ ストリート・チルドレン対策
- ④ HIV／AIDS対策

(3) 環境運動
- ① 生物の多様性保護
- ② 再森林化、植樹
- ③ 農薬から有機農業への転換
- ④ 浄水プロジェクト

◀ホーチミン市、コミュニストユースユニオンで打ち合わせ

CYDECO

CYDECO（International Youth Cooperation Development Center 国際青年協力開発センター）は、1955年に設立された半官半民の団体であり、Loi氏（General Director）を中心として英語、フランス語、ロシア語、中国語、スペイン語を話せる職員12名で構成されている。

CYDECOは、ヴィエトナム政府及び青年連盟を始め、各種の青少年団体の行う国際交流及び国際協力事業を扱っている一方、青年の人材開発（Human Resource Development）プログラムの調整も行っている。前半の比率が70%、後半の比率が30%である。

国際交流の分野では、フランス、オーストラリアとは定期的交流があり、シンガポール、アメリカ、韓国などとも交流している。日本とは福岡、苫小牧、横浜との交流がある。昨年は655人の外国人を招へいし、300人のヴィエトナム人を海外に派遣した。

人材開発プログラムには、OISCAとの農村開発事業、フランスとの薬物乱用者の社会復帰プログラム、UNESCOとの児童の識字率向上プログラムや人形劇、音楽、舞踊などの伝統文化継承プログラムがある。その他国連開発プログラム（UNDP）、ESCAP、WHO、UNFPA（国連人口基金）、UNICEFなどの国際機関とも連携したプログラムを国内の関係諸機関・省庁と連絡調整する。

3/23 到着	Hai Anh氏（'96 YL）との打ち合わせ 人形劇見学
3/24	*日本大使館訪問（穴吹参事官、石田氏） *CYDECO訪問 Tran Dac Loi氏（責任者）らとの懇談 Hai Anh氏（'96YL「東ア船」担当） Nguyen Thi Hoang Van氏 （「21世紀の友情計画」担当） *'95年、'96年度既参加青年16名との懇談
3/25	*CYDECO再訪問 青少年団体の活動について Diep Quang Huong氏（'96 YL） Hai Anh氏 CYDECOのスタッフと昼食会 ホーチミンへ移動 *'96年度参加青年のLynh氏（AYL）、Thuy氏と懇談
3/26	*HO CHI MINH CITY COMMUNIST YOUTH UNION訪問 Pham Duc Hai氏（Vice Secretary、'95年度参加青年） Ho My Phuong氏（'95年度参加青年）との懇談 *日本総領事館訪問（小野領事、小島副領事） *HO CHI MINH CITY COMMUNIST YOUTH UNION主催の第5地区フェスティバル見学 〔3／27帰国〕

〈ヴィエトナムの訪問日程〉

短い滞在の間に多くの方の協力を得て実り多い訪問でした。

▼ 日本大使館の穴吹参事官、石田氏とともに

重油の海に見たもの

山下　亮
（平成８年度日韓青年親善交流事業渉外団員）

1997年１月、日本海沖でロシアのタンカーが沈没、沿岸に重油が漂着するという事件が起きました。僕は、その流れ着いた重油の除去ボランティアとして、福井県の三国町へ行ってきました。僕が行った２月には、バケツで直接汲み取るほどの悲惨さはなかったものの、荒天の中、真っ黒に染まった海岸に磯の香りはありませんでした。ボランティアに参加したきっかけは、大きな信念や自然愛護心があったわけではなく、社会勉強になるだろうという軽い気持ちでしたが、実際現場にいるうちに、そんな自分や今までの生き方、そして現代の社会生活についてじっくり見つめ直すことになりました。

ボランティアの現場で、まず僕の心を捉えたものは、人と人との「ふれあい」でした。ボランティア本部では、スタッフがテキパキとかつにこやかに応対してくれ、いちばん打撃を受けている地元の方々も僕たちをとても温かく迎えて下さいました。人の「善意」を最大限に生かすことのできるシステムが、あんなにも辛い災害の中に生まれていることに感銘を受けました。

そんな中、一人一人のボランティアも年齢や性別を越えて協力しあい、理解と交流を深めていきました。「人間のために海があるんじゃないってことが分かった。」「いつも使っている石油がこんなに人や自然を困らせるものなのか。」「ボランティアは“してあげる”っている考え方にどうしてもなってしまう。」などと、率直に気持ちを話合うことで皆が同じ気持ち、同じ目的を共有できたのです。油まみれの岩の下に小さなフナムシがいるのを見て、みんなで「生きてるぞ！」と喜びあう、そんな純粋な心が少しずつ海をきれいにしていくようでした。

▲ 沈没した船首部分をバックに（筆者左）

また、同時に、現代社会が持つ大きな問題についても考えさせられました。ゴミ問題や資源の枯渇、自然破壊など、様々な「環境問題」は、現代人である我々が自分の目の届かないところに追いやっているだけだという浅薄さに、重油にまみれてやっと気付いた自分が恥ずかしくもあり、これからは自分のやれることはやっていこうと決意しました。

「人は自然を壊す力は強いが、戻す力は弱い」と言われます。それでも人が集まってできる力は大きなものでした。「最近の若者は……。今の日本は……」などといわれる今日、日本海の海岸で新しい世界へのヒントを見つけた気がします。

パレスチナとユーゴスラビアで選挙監視の任務について

日本青年国際交流機構幹事（組織担当）
森田　充浩

1996年は歴史的に見て大きな変化の年と言える。1月には、第2次世界対戦の大国のエゴイズムによって複雑化していたパレスチナ問題が、そして9月には、旧ユーゴスラビアの独立問題で紛糾していたボスニア問題が、選挙という形で終止符を打ったのである。

この二つの問題を終わらせ、新しい国家の枠組みを作る為に、前者はオスロ合意に基きEU（ヨーロッパ共同体）が、後者はディトン合意に基づきOECE（欧州安全協力機構）が主体となって実施した。私は幸運にも両方の選挙監視員として参加し、歴史の転機に立ち会うことができた。

日本はパレスチナ選挙の実施に伴い、国別では最大規模の50人以上を送り込んだ。パレスチナの地は、ガザ地区とヨルダン川西岸に分かれ、長い間イスラエルの占領下に置かれていた。ユダヤ教徒でヘブライ語を使い、近代都市国家のイスラエルと、イスラム教の教えを信じ、アラビア語を使う貧しいパレスチナの土地に暮らすパレスチナ人では、生活環境に雲泥の差がある。私は、ガザ地区の南端を担当したが、選挙当日、大勢の人々が投票所に足を運び、投票所では混乱する場面もあったが、長年の抑圧からの解放を感じ取れて感動した。開票作業も夜を徹して見守っていたが、不正はほとんどなく、翌朝の青空にコーランが流れる中をパレスチナ国旗がたなびいていたのが印象的であった。

ボスニア・ヘルツェゴビナ紛争とは、旧ユーゴスラビアからスロベニア、クロアチアが独立してしまった為、それまで民族融和の象徴的な地域であったボスニアがセルビア人、クロアチア人、モスリム人の三つ巴の戦いの場となってしまった問題である。首都のサラエボは冬季オリンピックが開催された近代都市国家である。破壊されたままのビルや銃痕が残る家や未処理の地雷地帯などはあるが、中世ヨーロッパを感じさせる美しい街である。私はこのサラエボで選挙監視の任についた。

選挙システムは複雑で、同日に4種の選挙を行うため、長時間の労働を強いられた。ボスニアは大きく二つに分けられ、セルビア人主体のスルプスカ共和国とクロアチア人、モスリム人主体のボスニア連邦に分断され、それぞれの民族の代表者が国を運営する仕組みになっている。この為、この選挙では民族の分断を加速するのに手を貸すことはなかったのかもしれない。

選挙監視活動は体力的にも生活環境の面でも決して楽な仕事ではないが、「新しくできる国家の手助けに少しでもなれた」という充実感がある。それにいろいろな国の人達と知り合いになれ、その土地の文化を学ぶこともできる。

外国文化に触れ、相互理解を促す国際交流から、相手国の自立の一助になる国際貢献へも日本の目を向けてもらいたいものである。

私は、これからもこのような活動を続けていきたいと思う。後に続く人が多く出て、共に活動できたらと願っている。

青年海外協力隊「平成9年度春の募集」について

青年海外協力隊は、国際協力事業団が実施する政府事業で、31年間に約16,000名の協力隊員が50数か国に及ぶ世界各地で協力活動を行っています。

総務庁青少年対策本部の青少年国際交流事業の参加者からも、多くの青年海外協力隊員が出ていることを皆さんはご存じですか。また、国際協力事業団の職員にも既参加青年が多く採用されています。自分の力を海外で役立てたいと思っている貴方！　厳しい試験ですが、チャレンジしてみませんか。

募集期間：平成9年4月15日（火）～5月31日（土）
募集規模：約140職種、約800名を募集
応募資格：満20歳から満30歳（平成9年5月31日現在）までの日本国籍を持つ方
派遣期間：2年間（単身赴任／現地生活費・国内積立金等が支給されます。）
選考試験：一次選考／筆記試験（技術、英語、協力隊員適正テスト）と健康診断（書類審査）
平成9年6月15日（日）、各都道府県で実施。
二次選考／面接試験（個人面接・技術面接）と健康診断（検診）
平成9年7月23日（水）～7月31日（木）の指定日（土日を除く）に東京で実施。
訓　　練：出発前に約80日の合宿訓練を受けます。

応募方法：所定の願書を協力隊事務局に提出のこと。締切／平成9年5月31日（消印有効）
〔問い合わせ・願書請求〕　〒151 東京都渋谷区代々木2－1－1　新宿マインズタワー6F
国際協力事業団　青年海外協力隊事務局　☎03－5352－7261
〔詳細資料の請求について〕詳細資料は、返信用切手390円分を同封の上、次の宛先まで請求して下さい。
（〒163 東京都新宿区新宿郵便局局留　青年海外協力隊事務局宛）

第13回青少年国際理解セミナー

「第9回世界青年の船」帰国報告会

平成8年度の「第9回世界青年の船」参加青年による帰国報告会が下記の日程で行われます。総務庁青少年国際交流事業について知りたいと思っている友人知人の方々に、ぜひ知らせてあげて下さい。

総務庁青少年対策本部が行う青少年国際交流事業についての全体的説明コーナーもありますので、他の事業に興味のある方にも声をかけてあげて下さい。

日　　時：1997年7月27日（日）　12:30～16:30
会　　場：国立オリンピック記念青少年総合センター　国際会議室
参 加 費：無　料
主な内容：船内及びニュー・ジーランド、チリ、コスタ・リカ、メキシコでの活動を撮影した写真や団員が持ち帰った品々の展示、ビデオ上映、事業体験談発表、グループ別懇談等のプログラムに各国のお茶やお菓子を楽しみながら参加していただきます。
申 込 み：㈶青少年国際交流推進センターの「セミナー係」まで電話、ＦＡＸ又は葉書にてお申込み下さい。宛先は、下欄の㈶青少年国際交流推進センター事務局へ。

ブロック大会のお知らせ

＊北海道・東北ブロック	宮 城 県	9月6日（土）・7日（日）
＊中部ブロック	静 岡 県	8月2日（土）・3日（日）
＊近畿ブロック	奈 良 県	7月5日（土）・6日（日）
＊中部ブロック	広 島 県	8月30日（土）・31日（日）

編集後記

㈶青少年国際交流推進センターもこの4月で、設立3周年を迎えました。日本青年国際交流機構会員の皆さんの寄付金と多くの関係者の理解を得て資金提供を受け、夢は実現したのです。

今後も実績を積み重ねながら確実な地盤作りを目指し、新たなるスタートを切る意気込みで。

＊本誌の年間講読をご希望の方は、㈶青少年国際交流推進センターまで葉書又はＦＡＸにてお申込み下さい。年間講読料は1,500円です。

MACROCOSM（マクロコズム）　5月号　Vol.16　1997年5月1日発行（隔月発行）
編　集：マクロコズム編集委員会
発　行：財団法人　青少年国際交流推進センター
〒103 東京都中央区日本橋人形町2－35－14
TEL　03－3249－0767
FAX　03－3639－2436
e-mail LDP 04056 @niftyserve. or. jp
編集協力：総務庁青少年対策本部
日本青年国際交流機構
定　　価：198円（本体189円）
印 刷 所：株式会社　絢 文 社
TEL　03－3959－3960

大好評!! バンコク・リフレッシュクルーズ 1996

昨年の9月27日～10月8日の日程で、「第23回東南アジア青年の船」の最初の寄港地であるバンコクまで、OB／OGを対象とした初の試みとしてリフレッシュクルーズが実施されました。参加者32名は、「第23回東南アジア青年の船」の日本参加青年や各国のナショナルリーダー、アセアンのホストファミリーとの交流を積極的に行い、有意義な時間を過ごすとともに、久しぶりの船上生活、そしてタイ王国でのプログラムを楽しみました。

◀ 毎朝頑張りました。6時半からのおはよう体操

▶ インドネシアのナショナルリーダーからお国事情を講演していただく通訳役の椿さん、お疲れさまでした

◀ ナショナルリーダー、ホストファミリーとの懇談会

▼ 自主企画2「日本の遊び」でホストファミリーと交流会

◀ 自主企画1「お手玉作り」にトライ。世代を越えた交流?!

◀ 現役青年も一緒にレクリェーションゲーム

▲ 船や海の興味深い内容に加え、渡辺キャプテンご自身の話も飛び出した船長講話

▼ 食卓を華やかに……。「ナプキン折教室」

▶ クルーの丁寧な指導でロープワークにチャレンジ

▲ 操舵室では橋本一等航海士の説明を受けました

◀ 歴史の地アユタヤ訪問

今年もご好評にお応えして「シンガポール・リフレッシュクルーズ」を実施致します。詳細をご希望の方は日本青年国際交流機構事務局にＦＡＸまたは葉書にて「クルーズ資料希望」と記載の上お送り下さい。申込み用紙を同封して詳細資料をお送りします。

〔お問い合わせ先〕　〒103　東京都中央区日本橋人形町２－35－14　東京海苔会館 6F
日本青年国際交流機構事務局　TEL　03-3249-0767　FAX　03-3639-2436